

1-1 建物概要		1-2 外観	
建物名称	財団法人塩事業センター海水総合研究所	階数	地上3階
建設地	神奈川県小田原市酒匂4-13-20	構造	RC造
用途地域	近隣商業地域、第一種住居地域、準防火地域	平均居住人員	32人
気候区分		年間使用時間	2,160時間/年
建物用途	事務所	評価の段階	実施設計段階評価
竣工年	2014年1月	評価の実施日	2012年12月12日
敷地面積	3,144 m <sup>2</sup>	作成者	鹿島建設株式会社
建築面積	1,017 m <sup>2</sup>	確認日	2012年12月20日
延床面積	2,733 m <sup>2</sup>	確認者	鹿島建設株式会社



### 2-1 建築物の環境効率(BEEランク&チャート)

**BEE = 1.9** ★★★★★

S: A: B+: B-: C:

### 2-2 ライフサイクルCO<sub>2</sub>(温暖化影響チャート)

標準計算  
参照値  
建築物の取組み  
上記+ 以外の  
上記+

(kg-CO<sub>2</sub>/年・m<sup>2</sup>)

### 2-3 大項目の評価(レーダーチャート)

Q2 サービス性能  
Q1 室内環境  
Q3 室外環境(敷地内)  
LR1 エネルギー  
LR2 資源・マテリアル  
LR3 敷地外環境

### 2-4 中項目の評価(バーチャート)

**Q 環境品質** **Qのスコア = 3.5**

#### Q1 室内環境

Q1のスコア = 3.4

#### Q2 サービス性能

Q2のスコア = 3.6

#### Q3 室外環境(敷地内)

Q3のスコア = 3.7

**LR 環境負荷低減性** **LRのスコア = 3.6**

#### LR1 エネルギー

LR1のスコア = 4.0

#### LR2 資源・マテリアル

LR2のスコア = 3.6

#### LR3 敷地外環境

LR3のスコア = 3.3

3 設計上の配慮事項		
<b>総合</b> あらゆる研究実験体制や将来変更に対応可能な自由度の高い基本空間構成を持ち、研究者の創造性とコミュニケーションをサポートするための環境に配慮した快適な居室空間を作りだすことを主目的とした。明快なゾーニングにより、セキュリティを確保しながら、一般市民にも開放される開かれた研究所の創設。		<b>その他</b> 広域避難施設である酒匂小学校に対して、非常時に防災拠点の補完施設になることも想定した機能・場の提供。津波時の屋上避難スペースを確保。
<b>Q1 室内環境</b> 自然換気を採用し、充分な換気が行えるよう開口部を設置した。また、南側の大きな開口部には庇を設け、外部の光を適切に取り込み、室内の光環境向上を図っている。	<b>Q2 サービス性能</b> 事務室・研究室としての機能性に配慮し、内・外装とも維持管理を考慮した仕上げ・構成としている。また、そのための設備も適切に設けている。将来の変更・更新にも対応できる平面・断面構成。	<b>Q3 室外環境(敷地内)</b> この地域の特色でもある敷地に生えていた松を内装の一部として再利用。また、既存樹木を可能な限り残し、景観維持に努めた。敷地内は緑化に努め、熱負荷の抑制を図っている。
<b>LR1 エネルギー</b> 南東面の開口部には熱性能値の高いガラスを採用。さらに庇を設けることで熱負荷を低減。RC外壁部は全周断熱を施すことで、熱負荷の抑制に努めた。	<b>LR2 資源・マテリアル</b> リサイクル材、再利用できる建築部材を積極的に利用。有害物質を含まない建築材料の使用に努める。	<b>LR3 敷地外環境</b> 建物内および外構の照明計画にあたり、敷地外へ光害が発生しないよう努めた。

CASBEE: Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency (建築環境総合性能評価システム)  
 Q: Quality (建築物の環境品質)、L: Load (建築物の環境負荷)、LR: Load Reduction (建築物の環境負荷低減性)、BEE: Building Environmental Efficiency (建築物の環境効率)  
 「ライフサイクルCO<sub>2</sub>」とは、建築物の部材生産・建設から運用、改修、解体廃棄に至る一生の間の二酸化炭素排出量を、建築物の寿命年数で除した年間二酸化炭素排出量のこと  
 評価対象のライフサイクルCO<sub>2</sub>排出量は、Q2、LR1、LR2中の建築物の寿命、省エネルギー、省資源などの項目の評価結果から自動的に算出される